

まんまで えーやん

定時制・湊川高校の春

⑤

いつも元気な権田祐也君(18)には重い脳性まひがある。元クラスメートの女子生徒が教えてくれた。

「最初は話しかけづらかった。あいさつしても無反応に見えたし。でも、繰り返し返したら、言いたいことが分かってきた」

権田君はしゃべらない。パソコンで文字を打つことも練習しているが、体が揺れて今のところ難しい。

コミュニケーションの基本は、うなずくか、首をふるか。

だから、学校の試験は先生お手製の選択問題だ。支援員が読み上げ、正解と思ったら大きくうなずく。努力の成果で、期末試験の英語は7割以上の出来。出席率も申し分ないので、進級は順調だ。

そんな権田君だが、よくよく

チーム権田 ⑤

付き合つと雄弁だと分かる。機嫌が良ければ声を出して笑うし、怒ると眉間にしわが寄つて怖い。相手をまつすぐに見つめ、こちらが名乗つてあいさつをする。と軽くうなずく。

「あ、ども」って意味だね。心の声はちゃんと聞こえるのだ。

毎日一緒に遊ぶ級友たちはもつと自然。権田君の控室に顔を出し「支援員さんの寒いギャグに権

田くんだけ、笑ってました」。

帰りは控室をのぞいて「また明日ねー」と声をかける。だから、扉を閉めると権田君は怒る。

行事も楽しかった。一昨年9月の体育祭では、女子生徒が車

いすを押して借り物競走に出場した。札は「校長先生」。あわてて駆け寄る水畑哲也校長(60)

「3月末で退職」と着でゴールした。文化祭もボウリング大会もクラスのみんなと楽しん

だ。学校生活をサポートする12人の「チーム権田」の面々も、今ではすっかり生徒と顔なじみだ。

「廊下のあちこちで先生に話を聞いてもらっている生徒をよく見かけます」。そう話す母親の由記子さんも「ねえ見て見て」とマニキュアの輝く爪でスマホの画面を突き出されている。

水畑校長が、下がり気味の尻を一層下げて、しみじみと言う。

「権田君が入学してくれて、いいことしかなかった。彼が私たちに伝えてくれることは本当に多い」

権田君の合格を知り「私も受け入れて」と入学した生徒がいる。「将来は福祉の仕事」と決めた級友もいる。

ただでさえ多様な学校に、権田君が新たな化学反応を起こしているのだ。

(鈴木久仁子)



茶髪になった権田君。神戸市長田区寺池町1(撮影・秋山亮太)

彼の入学「いいことしかない」